



故グラント教授

を偲んで

木村俊夫

Robert H. Grant教授が、去る九月十六日に急逝されたことは、全く意外なでき事であり、痛恨事であった。五十日祭十一月四日に、近くにひかえ、また若王子の宣教師墓地に、先生のお骨が納められる(十一月二十九日)ことも決定した今においても、先生急逝の事を認めまいとする気が強く残っている。未練なのである。

あの日のちようど三日前、長かった夏休みも終わり、後期開講を直前にして、久しぶりに研究室で先生としばらく閑談したが、あれが生前の先生とお話しできる最後の機会になるとは、夢思わぬことであった。昨年夏から少し健康を害され、以後養生に専心された先生は、この夏休みを野尻湖で過ごされ、自転車やボートを用いて、熱心に身体の訓練をされた。そんな事どもを楽しげに語っておられる先生は、少し日やけて、ずっと肉もひきしまり、すこぶる健康に見えた。今や心臓のある小さな部分だけに故障が残っているが、それもやがてなくなる見込み、といっておられた言葉が、いまだ私の耳の中に奇妙なひびきをたてている。虫の報らせというのか、その日はまた先生の書かれた遺言状のことも話

題になつたが、少しふざけて私が、「遺言状を書いたからといって、急いで死んではいけません」と言ったら、「死ぬものか」と強く先生はこたえて、童顔をくずして笑っておられた。それに先生はよく以前から、ご自分の定年後の生活についても語っておられた。自分は日本の土になる、ということであった。しかし、そのことが、こんなに早く訪れるとは。

一九一一年の生まれであるから、まだ六十歳であった。アメリカ、メイン州キタリーの生まれ。ボーデン大学、ニュー・ハンプシャー大学、ユニオン神学校、コロンビア大学、それにカリフォルニア大学でも学んでおられる。しばらく、ニュー・ハンプシャー大学などで教職についた後で、先生が、アメリカン・ボードの派遣宣教師として来日されたのは、一九四七年のことであった。以後の三十年近い年月、先生の生活は、全て同志社、わけても大学文学部英文学科の育成、充実に捧げられた。英文学科は、先生を持つことにより、その陣容に非常に厚みを加えた。またここが今学界においても高いプレステージを保持することができているのも、先生の存

在をぬきにしては考えられぬことである。今、先生の同僚、友人、また親しく教えた者どもが、相よって、先生追悼の記念事業の計画を熱心に進めているが、それも当然のことである。先生のもっとくわしい履歴、英文学科でのご担当科目のことなどは、いずれこの記念事業計画の中で、正確に記録されることになると思うので、以下私の個人的な追想を、とりとめもないまま、敢えて書き続けて行く。

私も後輩の一人として、先生の同志社ご着任の当初から、お近付きになることを得て、いろいろご指導をいただいていたが、その初めの頃は、敗戦国民と戦勝国民との関係へのこだわり、それに私の英語のまずさへの気恥ずかしさなど、が奇妙なコンプレックスを作り、こちらからは余りうちとけて行かぬ自分であった。まだ田中飛鳥井町——当時先生はこの難しい字を、私あての手紙にもていねいに書いておられた——に住んでおられた頃、上野先生(名誉教授)の肝いりで、同僚教人と先生の家へスピーチの練習に通ったこともあった。私の下手な英語を辛抱して聞いてもらい、いただいたねぎらいの言葉の、何と皮肉

にひびき、いたかったことか。しかしそんな日からもうずいぶん時間がたった。ばかなコンプレックスもいつしかとれて、近頃では、私は「Gさん」、と呼んでみたり、便々たる先生のお腹をさすっては、くすぐったがらせてみたりもしていた。先生の方からも、「ヘイ・ボス」とか「ヘイ・ガクシャ」とか、いたずらっぽく呼びかけてきては、公私にわたる事柄について話をされた。その度ごとに、諧謔が入り、いつもにこやかであった。

「アメリカカ文学史」を担当しておられた時期はかなり長かったが、その内現代劇の部分は、よく代講を仰せつかったものである。もちろん教室で自分が何をしゃべったかも報告はしておいたが、試験問題に私の代講部分のみごとに折りこまれているのをみて、驚いたものである。また、ご自分でドラマの演習をうけもたれる時には、クラスにはどれだけの作品の組み合わせがよいか、年間読書量はどれくらいを要求するのが適当か、など熱心なご相談をうけもした。ご担当科目の教授細目、進度予定表など、そのコピーをしばしば見せてもらったが、実に綿密に作成されたものであった。もっと私的なことでは、いつか

室町今出川のお宅を訪れた時、出された紅茶にうかせてあった葉を、アメリカ渡米のミントと教わり、庭に乱れ生えているその一株をもらって帰ったこともあった。先生の告別式の当日、同じ場所に生えていたこの草にふと気がついた私は、その葉二、三枚をこっそりもぎとってなめた。何故か。うまく説明もつけないが、時間を昔しに戻そうとするはかない願ひもこもっていたのである。もらったミントの苗は、一昨年枯らせてしまったが、シエイクスピアの石膏像の方は、今も研究室の私の机上を飾っている。これも数年前、突然ふらりと私の部屋にたち現れた先生が、「これはこの部屋に置くのがふさわしい」とかいって、置いていかれたものである。これもあり難くいただいたが、この像の来歴も聞かずじまいに終わってしまった。いつか聞こうと思っていたのだが。

一敗戦後しばらくの日本にとびこんで来られた先生は、生活習慣、感情、思想の持ち方に多くのちがいを持つわれわれの社会を、熱心に理解し、その生活にアジャストしようとする努力されていた。まだ致遠館の二階に先生の席があった頃、よく白い布でくるんだアルミ(㊦)

の弁当箱を持参しておられた。中味まではよくは見なかったが、たしか箸も使っておられた。そして食べ物の好みの話しをしていた。その時に、「オコーコ、タベマス」という日本語のあったのを不思議によく覚えていた。しかしまたアメリカ人である先生には、この国の思考の型、感情の持ち方が、どうにも納得できず、よく学生の勉強態度、学校、また日本の社会全体のあり方に、手きびしい批判をされるのも聞いた。そしてまた批判している自分を反省し、更にまた母国アメリカの批判の言葉をもらしておられるのも聞いた。ある日の雑談の折に「自分は日本語の方は上手になれなかった。また今まで、日本の、同志社の多くのことについて批判もしてきたが、時がたつにつれて、不思議に、日本と、同志社への愛着は増すばかりである」と述懐しておられた。しみじみとした言葉であった。

先生が、批判もしながら、しかし終始変わらず、笑顔で、実にさり気ない形で、われわれ皆に、実に行きとどいた協力をしていただいたのも、この底ぬけの愛情があればこそであったにちがいない。

先生は、宣教師としては、私風に表現すれ

ば、抹香くささのない人であった。しかし宣教師としての燃えるような使命感を持ってこそ、あの生涯を送られたのであることは否定の仕様もない。この先生をして、われわれの所へ来ることを決意させた動機は何であったのか。一時は中国へ行く予定であったと聞くが、どんないきさつがあったのか。先生は戦時中に、良心的戦争拒否者としての自分を貫かれたそうであるが、その頃のことともっと知りたい。日本の娘さん二人までもをひきとって、立派に成人されるまで育てられた。先年亡くなられた前夫人ジーンも実にやさしい人柄の方であった。現夫人のことは「キョーコ」と呼んで、しばしば話の中にでてきた。ここにも暖かい愛情がこもっていた。そんな家庭のことについても、ふみこんで語ってもらえるものなら語ってほしい。時々帰米される——飛行機がきらいなのか、いつも船、貨物船を利用していた——折の講演旅行では、日本のことについて論じられたはずであるが、その内容はくわしくはどんなことであったのか。来日されて以来、日本は急速に、しかも大きい変化をとげた。その間日米関係にも微妙な変化があった。先生の心にも、こ

の二十七年間に、さまざまな変化が起こったはずである。それはどんな軌跡を示すのか。そんな事どもについて、先生自身の口から語ってほしい思つて、私は数年前から、押しつけがましいのは承知で、先生に、自伝を書いて下さい、と頼んでいた。しかしそれも遂に果たしていただけなくなった今では、私は勝手に自分の胸の中で先生の伝記を書くしか仕様がなない。それはまだ系統だった言葉には定着できないが、その私の胸には、あの童顔——善意にみちあふれ、少しやんちゃな、メイン州に生まれ、京都で歿した一人のヤンキー、Gさんの童顔、が強くやきついている。

(十月三十日記)

